

# 近世期における「御所ことば」の記載について —東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告—

## On a record of “The Language of Court Ladies” at the Edo era — A report from “OURAIMONO classification collection” of General Library, The University of Tokyo possession —

郡 千寿子\*  
Chizuko KOHRI\*

### 要 旨

東京大学総合図書館に所蔵されている「往来物分類集成」を調査し、「御所ことば」「女中ことば」等と記載された用語に焦点を絞って考察検討したものである。マイクロフィルム版資料—リール数66本、1115資料の文献—による調査であるが、その中から、特に近世期において、上流階級の女性たちに使用されていた語彙について、翻字と紹介を試みた。検討の結果、品詞別では名詞が圧倒的多数であることが知られ、それらを衣生活語彙、食生活語彙、住生活語彙、呼称、数え方といった五種に分類整理した。特殊な用語として認識されていたこれらの語彙を概観すると、近世期の使われ方がそのまま現代へと継承された語例もあれば、継承されずに消滅してしまった語例もある。これらの語彙の存在は、現代語—特に食生活語—の形成に大きな影響を与えた可能性があると考えられ、言語の伝播や変化過程の研究に対する貴重な報告といえる。

キーワード：近世語、女性語、御所ことば、女中ことば、女房ことば

### 1 はじめに

近世期の女性たちが使ったと思われる用語の一面について、往来物資料の記載を通して考察検討<sup>1)</sup>したことがある。本稿は、その関連研究として、東京大学附属図書館所蔵のマイクロフィルム版「往来物分類集成」の資料群を用いた調査結果について報告するものである。

文献資料中で「御所ことば」「やまとことば」「女中ことば」等と記載された用語に焦点を絞って紹介するが、これらの語群は、中古中世期のいわゆる「女房ことば」<sup>2)</sup>からの系譜が多いと考えられる。しかし、従来、近世期にどのような資料にどのように記載されているかを含め、ほとんど研究がなされてこなかった。本稿では、それぞれの文献資料に記載された用語を翻字紹介し、表記や振り仮名などもそのまま提示した。それらの語彙についての分類整理も試みた。今後、言

語変化や伝播の研究へとつなげていきたいが、生活言語文化を考える上にも貴重な調査報告となるであろう。

### 2 東京大学附属図書館所蔵『往来物分類集成』について

東京大学附属図書館に所蔵されている「往来物分類集成」のマイクロフィルム版を閲覧し、調査した。石川松太郎著『往来物の成立と展開』（雄松堂、1988年）に「往来物分類集成」（マイクロフィルム版）の収録書目録があり、それを参考に分類も従った。マイクロフィルムのリール数は66本におよび、膨大な文献資料数であった。収められた東京大学総合図書館蔵の往来物は、岡村金太郎（1867～1935）の旧蔵本が大多数を占め、これに旧南葵文庫蔵本その他が加えられたものである。これらの収録文献資料は、計1115本

\*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

という膨大なものである。

熟語類	リール1～12	220資料
消息類	リール13～28	180資料
訓育類	リール29～42	274資料
歴史類	リール43～46	68資料
地理類	リール47～54	185資料
実業類	リール55～60	118資料
合書類	リール61～62	18資料
理学類	リール63～64	27資料
雑書類	リール65～66	25資料

以上のうち、「御所ことば」<sup>3)</sup>「女中ことば」<sup>4)</sup>等と明記し、女性に特有のことば遣いとしてまとめて記載されていたものは、熟語類で2本、消息類で1本、訓育類で5本、合書類で1本の計9本の文献であった。往来物の分類としては、女子用往来を別立てして考える立場<sup>5)</sup>もあるが、ここでは、便宜上、前述の分類によった。本稿でとりあげる研究対象資料8本について簡単にまとめておく。

『女源氏教訓鑑』一冊本 享保6年刊 江戸 須賀屋茂兵衛 京都 小森善兵衛 大坂 大野木市兵衛 「御所言葉」

『百人一首』一冊本 刊年出版元不明 「女中大和ことば言」

『女文台綾囊』一冊本 延享元年刊 田中友水子編 寺井重信画 大坂 柏原屋与市・河内屋茂兵衛 「日用大和詞」

『女今川』一冊本 巻頭巻末欠 「女中御所言葉」

『明治再刻 女大学宝箱』一冊本 明治2年刊 (内)女大学 貝原益軒作 東京 森屋治兵衛 「女中詞乃事」

『女教補談囊』一冊本 宝暦4年刊 雪悦齋村井淇水作 鈴木春信画 京都 菊屋七郎兵衛 「女中やまと言葉」

『女教訓千代の鶴』一冊本 弘化2年刊 木村腸応作 江戸 和泉屋吉兵衛 「女中詞つかひの事」

『女四季用文』一冊本 刊年不明 永寿堂西村与八 「女中倭詞」

『女訓手習鏡』一冊本 慶応2年刊 内野善邦編 歌川国貞画 京都 出雲寺文次郎大阪 敦賀屋九兵衛 「御所言葉」

### 3 『源氏教訓鑑』の記載について

「御所言葉」として以下のような言葉が列挙されている。総語数は70語ですべて名詞である。一丁分の上

段、いわゆる頭書と呼ばれる箇所「御所言葉」の記載があり、画も挿入され、下段に「源氏物語之大意」本文がある。

#### 「御所言葉」

- 一 小袖ハ〇ごふく
- 一 わたハ〇おなか
- 一 よきハ〇よるのもの
- 一 どんすがや〇どんちやう
- 一 こんにやくハ〇にやく
- 一 とうふかす〇おかべから
- 一 ゆのこハ〇おゆのした
- 一 しゃうゆハ〇おしたし
- 一 なすびハ〇なす
- 一 よめがはきハ〇よめな
- 一 おびハ〇おもじ
- 一 ゆびハ〇ゆもじ
- 一 かやハ〇かちやう
- 一 へにハ〇おいろ
- 一 めしハ〇ぐご
- 一 さけハ〇九こん
- 一 こめハ〇うちまき
- 一 みそハ〇むし
- 一 あま酒ハ〇あま九こん
- 一 むかみそ〇さきじん
- 一 こぬかハ〇まちかね
- 一 もちハ〇かちん
- 一 だんごハ〇いしいし
- 一 せきはんハ〇こはぐご
- 一 ちまきハ〇まき
- 一 しんこハ〇しらいと
- 一 とうふハ〇おかべ
- 一 でんがくハ〇おでん
- 一 ほたもち〇やはやは
- 一 そばかゆもち〇うすずみ
- 一 やきめしハ〇おこなめし
- 一 ふのやきハ〇あさがほ
- 一 さうめんハ〇ぞろ
- 一 なめしハ〇はのぐご
- 一 のりハ〇のもじ
- 一 ささけハ〇ささ
- 一 ほしなハ〇ひば
- 一 ちさハ〇おはいろ
- 一 大こんハ〇からもの
- 一 歌かるた〇ついまつ

- 一 すりこき〇こがらし
- 一 しやくし〇しやもじ
- 一 かななべハ〇かんくろ
- 一 こなすいも汁〇柳にまつ
- 一 まつたけ〇まつ
- 一 あさづけ〇あさあさ
- 一 ごほうハ〇こん
- 一 かうの物ハ〇かうかう
- 一 くきハ〇くもじ
- 一 竹の子ハ〇たけ
- 一 うこぎハ〇うのめ
- 一 するハ〇おつけ
- 一 さいハ〇おかず
- 一 白はし〇ねもじ
- 一 かずのこ〇かずかず
- 一 くじらハ〇おさぐり
- 一 すしハ〇すもじ
- 一 いかハ〇いもじ
- 一 うつをハ〇かか
- 一 糸びハ〇糸もじ
- 一 たこハ〇たもじ
- 一 小たい〇小ひら
- 一 するめ〇するする
- 一 ごまめハ〇ことのほら
- 一 金一分〇百ひき
- 一 ぜに百ハ〇一すじ
- 一 かみそり〇おけたれ
- 一 むかきハ〇せきもり
- 一 せつかい〇うぐひす

#### 4 『百人一首』の記載について

「女中大和言<sup>やまとことば</sup>」として、総語数59語の記載がある。これも、いわゆる頭書と呼ばれる箇所「女中大和言」の記載があり、下段に「百人一首」本文が人物像と共に描かれる体裁をとっている。特色としては、列挙する際、「あおも類」「魚るい<sup>ぎよ</sup>」「道具るい」と分類されて記載された点があげられる。また、先の『女源氏教訓鑑』には、名詞しかみられなかったが、動詞8語、形容詞1語の存在が確認された。『女源氏教訓鑑』に記載がみられない名詞について参考までに紹介しておきたい。

「かやをかちやう」「どんすのハどんちやう」は両者にみられるが、「もめんのハめんちやう」は『百人一首』に、また後述紹介資料の中では『明治再刻 女大

学宝箱』にもみられる用語である。『百人一首』では、「さけを九こん又ささとも」「もちをかちん又あも」と二種の呼び方を紹介している点も特徴的である。「あんもちハあんかちん」「ささげの餅ハふぢのはな」「しほハなみの花」、魚るいでは、「たらをゆきのおまな」「ますハはらか」「さけハあかおまな」等といった語は、『百人一首』に掲載されるが、『女源氏教訓鑑』にはみえない語であった。『女源氏教訓鑑』では「すりこき こがらし」とあったが『百人一首』では「れん木ハこがらし」となっている。総語数としては『女源氏教訓鑑』が70語、『百人一首』は59語であり、それぞれの記載語には、共通するものも多いが、相違点もあり、用語選択の背景に注意が必要である。動詞と形容詞がまとめて列挙されていた箇所も参考までに紹介しておく。

- 一 ねることを おしづまる
- 一 をきる事を おひるなる
- 一 なく事を おむつかる
- 一 髪あらふを おぐしさます
- 一 人よぶ事を めす
- 一 物まいるを あがる
- 一 むまい事を いしい
- 一 物きる事を したたむる
- 一 大小用すを 用をかなへる

#### 5 『女文台綾囊』の記載について

「日用大和詞」として、総語数71語の記載がある。『女源氏物語教訓鑑』では「御所言葉」、『百人一首』では「女中大和言」とあったが、『女文台綾囊』では「日用大和詞」といった、また新たな名称で記載されている。前述の資料と同様にここでも、いわゆる上段部分の頭書に「一こそでをこふくと云」「一わたをおなかと云」「一はな紙をおさしと云 宮家にて たとう紙と云也」等と列挙されている。

「小袖」や「わた」を「おなか」と称することは『女源氏物語教訓鑑』や『百人一首』にもみられた用語であるが、「はな紙」についての記載は、前述の二資料にはみられない。ただし、『明治再刻 女大宝箱』と『女教訓千代の鶴』にはとりあげられている用語であり、三資料にみられるものであった。このほか、『女源氏教訓鑑』と『百人一首』にみられず、『女文台綾囊』にとりあげられた用語としては、次のようなものがある。「にぎり飯を むすびと云」「わらび餅

を わらびかちん」「すいき汁を 夜のおつけ」「つくしをつく」「ひる飯をおごとと云」「ひや麦をきりといふ」「いひ餅を 月夜と云」「うをを おまなと云」「ぼた餅をおはぎと云」等。先に引用したように『女源氏物語教訓鑑』では「ぼたもちはやはや」とあり、『女訓手習鏡』も同様の用語であったが、「ぼた餅」を「おはぎ」と称した資料としては、この『女文台綾囊』のほか、『女今川』『明治再刻 女大学宝箱』『女四季用文』と四資料が「ぼたもち」を「おはぎ」と記載している。

動詞は四例で、「ねるを おしつまる」「おきるをおひるなる」「かみあらふを おくしすます」「大小用すを おとしにゆく」とあった。

## 6 『女今川』の記載について

『女今川』は、巻頭巻末欠の資料であり、字体や画に統一性がない箇所もみられ、元々は別の文献資料であったものが、合冊されて制作された可能性が大きい。『女今川』は最も普及した女性用の往来物資料のひとつであり、多種多様なものが知られている。この資料では、『女中御所言葉』として中段に記載がみられた。総語数は、74語である。

特徴的な用例としては、「握めしを むすびと云」と記載のある一方で、別の丁では「やきめしを むすびと云」と「握めし」と「やきめし」の両語が同じ「むすび」と呼び換えるといった記載がみられることである。また、「ぼた餅をおはぎ」と記載のある一方で、次丁には「ぼたもちを やはやと云」とあり、「ぼたもち」の呼び換え語としても、「おはぎ」「やはやは」の二種が、離れた別々の箇所に記載がみられることも注目される。

二種の呼び換え語があるような「酒」についていえば、たとえば『百人一首』では、「さけを九こん又ささとも」、『女文台綾囊』では、「酒はささ又九こん」というように、同時に示すのが一般的な記載例である。『女今川』にみられるように、別の丁、別の箇所にあらためて違った呼び換え語として示されることは珍しい。つまり、本来は別の文献資料だったものが、綴じかえられたり合冊されたりした痕跡を示したものと考えることもできるだろう。いずれにせよ、『女今川』で挙げられた用語のうち、他の資料にみえない用例としては、「貝あわせを かいおほひ」「ぜんをあげるを おぜんすべる」「ありくを おひろい」「一切の魚を おまな」等があった。

## 7 『明治再刻 女大学宝箱』の記載について

これは、明治2年に再刊されたもので、近世期にかなり普及した貝原益軒作の往来物のひとつである。「女中詞乃事」として、上段の頭書に総語数65語の記載がみられた。前述の『女源氏教訓鑑』『百人一首』『女文台綾囊』『女今川』の四資料と重複する用語が多いが、他の資料にみられない語としては、次のようなものがあった。「まめのこハ きなこ」、「たうき餅ハ もろこし」「よもぎ餅ハ くさのかちん」「あづきのもちハ あかのかちん」等である。

「まめのこ」は「大豆の粉」を指す用語であり、中世期には普通名詞として使用されていたことが、1603年成立の『日葡辞書』<sup>6)</sup>からも確認できる。「Mamenoco マメノコ(豆の粉)ほかの料理を作る材料として使う。挽いて砕いた大豆、あるいは豆。」とあるが、一方で「きなこ」の語は『日葡辞書』には立項されていない。つまり、中古中世期からの継承<sup>7)</sup>ではなく、近世期に新たに使い始められた語であった可能性がある。「大豆の粉」の色彩に着目し、その連想から「黄色い粉」を意味する、間接的な呼び換え語としての「きなこ」が使用されたと考えられる。

1698年成立の『書言字考節用集』<sup>8)</sup>には、「黄粉」とふりかな付き記載されており、近世期には、その存在を確認できる。この「きなこ」は、前述したように「女中詞乃事」として、女性が使う呼び換え語として機能していたが、現在においては、すでに一般名詞として通用するようになっている。たとえば、小型の机上版辞書『新明解国語辞典(第5版)』<sup>9)</sup>にも「きなこ」は立項された語であり、「煎ったダイズをひいた、黄色い粉。砂糖を加え、だんご・もちなどにまぶして食べる。」と説明されている。

一方、本来の用語であった「まめのこ」は、「まめのこ(豆の粉)→きなこ」と記載され、呼び換え語であった特殊用語であった「きなこ」の方が、現在では基本の用語となっていることがうかがえる。このように「きなこ」の語は、近世期の「女中詞」から派生し、女性使用に限らない一般名詞として定着を果たした語例であることを指摘することができるであろう。

## 8 『女教補談囊』の記載について

「女中やまと言葉」として、中下段のひと区画にまとめて18語の記載がみられる。用例が少ないため、すべて提示しておく。興味深いのは、「此外いろいろ有

けれども人も得しらねば耳立て悪し」と注釈があることである。「女中やまと言葉」はこの18語以外にもいろいろあるが、一般の人はあまり知らないので、耳慣れない言葉でよくない、といった趣旨である。つまり、当時はまだ、一般的な用語ではなかったことが示されており、やはり特殊なことばとして認識されていたらしいことが知られるのである。

たとえば、醤油を指す「おしたじ」は、この資料だけでなく、『女源氏教訓鑑』『女文台綾囊』『女大学宝箱』『女四季用文』『女教訓千代の鶴』『女訓手習鏡』の7資料に記載例がみられる用語であり、近世期には呼び換え語の代表例であったことが推測できる。『日葡辞書』には、「Xôyu. しょうゆ（醤油）」の項目はあるが、「おしたじ」は立項されておらず、中世の様相は知り得ないが、近世を経て現代ではどうであろうか。

『新明解国語辞典（第5版）』によれば、「おしたじ（御下地）しょうゆ」の女性語」と説明されている。また、最大の国語辞典『日本国語大辞典（第2版）』<sup>10</sup>によれば、「（「お」は接頭語。「したじ」はもと煮物や吸物に使うためにだしにしょうゆで味をつけたもの）しょうゆの丁寧語。」と説明され、「女性語」とは明記されていないが「丁寧語」との認識が示されている。つまり、「おしたじ」は、一般用語というより、女性語や丁寧語として生き残ってきたものであり、近世期の使われ方が現代語へと継承された語例のひとつであるといえる。女性使用の遠回しの表現で特殊な用語であったものが、直接表現を避けた丁寧で上品な表現として受容され、庶民へと伝わった。そうした言語伝播の経緯を示した語例と考えられるのであろう。

みそを おむし  
かうのもの  
 香物を かうかう  
 しんこを しらいと  
 たうふを おかへ  
 いわしを おぼそ  
もめん わたいれ  
 木綿の綿入を おひへ  
こと  
 ねる事を おしづまる  
せに  
 銭を おあし  
ははおや  
 母親を おもじ  
しやうゆう  
 醤油を おしたじ  
さけ  
 酒を ささ  
 だんごを いいし  
 きらずを おかべから

もちを かちん  
おき こと  
 起る事を おひるなる  
ひる  
 昼めしを おこご  
ちちおや  
 父親を ともし  
ゆ こ  
 湯の子を おした  
このほか あり ひと え みみだち あし  
 此外いろいろ有けれども人も得しらねば耳立て悪し

## 9 『女教訓千代の鶴』の記載について

じょうちうことば  
 「女中詞つかひの事」として上段、頭書に総語数39語の記載がある。ひらかなで記された資料が多いなかで、漢字表記で示しているという表記上の特徴があった。参考までに引用しておく。

いるい もの  
 衣類を おめし物  
ぬの こ  
 布子をおひへ  
わた  
 綿を おなか  
おひ  
 帯を おもじ  
よ き  
 夜着を よるのもの  
かちやう  
 蚊帳を かや  
はなかみ  
 鼻紙を おさつし  
かみ  
 髪を おぐし  
かみそり  
 髪剃を おけたれ  
べに  
 紅を おいろ  
ねる  
 寝を おしづまる  
おきる  
 起を おひるなる  
なく  
 啼を おむづかる  
ありく  
 歩行を おひろひ  
ひと  
 人を呼を めす  
ものくふ  
 物食を あがる  
うまい  
 旨を おいしひ  
み そ  
 味噌を むし  
もち  
 餅を かちん  
しん こ  
 真粉を しらいと  
だんご  
 団子を いいし  
めんるい  
 麺類を そろ  
にぎりめし  
 握飯を おむすび  
とうふ  
 豆腐を おかべ  
かす  
 豆腐の滓を きらず  
ゆ  
 湯の子を おした  
ほし な  
 乾菜を ひば  
たい  
 鯛を おひら  
いわし  
 鯛を おほそ  
するめ  
 鯛を するする  
こめ  
 米を うちまき

さけ 酒を ささ  
 しやうゆ 醬油を おしたじ  
 すし 鮓を すもし  
 でんがく 田楽を おでん  
 ごぼう 牛蒡を こん  
 こんやく 蒟蒻を にやく  
 だいこん 大根を からのもの  
 しほ 塩を しろもの

## 10 『女四季用文』の記載について

「女中倭詞<sup>ちようちやまとことば</sup>」として、「こめを うちまきと云」「みそを おむしといふ」「せうゆ おしたじ」「香の物かうかう」「さけ 九こん 又ささともしふ也」等、総語数54語が上段の頭書部分に列挙されている。ほとんどが他の資料にもみられた用語であるが、相違しているものとしては、「ます あかおまな」「焼ふな ゆきふき」「ごまめ ことのぼら 又たつくりとも」等があった。たとえば、『百人一首』で「魚るい」に挙げられていたものでいえば、「ますははらか」「さけハあかおまな」「ふなをゆきふき」とあり、『女四季用文』の呼び名とは一致していない。「かつをぶし かたかた」もこの資料にだけ記載がある用語である。

## 11 『女訓手習鏡』の記載について

「御所言葉<sup>ことば</sup>」として、総語数81語が上段の頭書部分に記載がみられた。この資料は、弘前市立図書館所蔵資料と同じ版本と思われるが、拙稿<sup>1)</sup>で考察検討したため、ここでは簡単にまとめておく。これらの語彙は、品詞でみると名詞と動詞に二分され、圧倒的に名詞が多く、動詞はわずかに「ねるハ おしづまる」「おきるハ おひるなる」「なくハ むづかる」といった3語だけであった。名詞は、それぞれ「食生活語彙」「衣生活語彙」「住生活語彙」「数え方」といった四分類で考えられることが判明した。

『女訓手習鏡』には、記載例がみられなかったが、前述した『女教補談囊』に存在する、「母親 おもじ」「父親 ともし」は、「呼称」として分類することができる。つまり、近世期に女性たちが継承してきた語群は、基本的には名詞の分類として、大きく五分類で考えることができると思われる。次節においては、そうした語彙分類により、傾向などについて検討考察してみたい。

ところで、本稿でとりあげてきた資料9本のうち、

総語数の多い二資料について少し比較しておきたい。総語数は81語と最も多数の『女訓手習鏡』と総語数70語の『女源氏教訓鑑』である。『女訓手習鏡』を基本とすると、その記載語彙の中で、『女源氏教訓鑑』と重複しているのは、81語のうち67語であった。『女訓手習鏡』にのみ記載がみられた語は、次の14語「いわしハ おむら」「たいハ おひら」「ねるハ おしづまる」「おきるハ おひるなる」「なくハ むづかる」「すりばちハ あらぢ」「なべかまハ くら」「ねぶかハ ひとつじ」「あづきもちハ あかのかちん」「めんるいハ ながもの」「ゆうはんハ よなか」「もめんハ ごふくめ」「ろうふから 卯の花」「しびんハ 大つぼ」である。「れん木ハ こがらし」「ざるハ せきもり」の2語については、『女源氏教訓鑑』で「すりこきハ こがらし」「みかきハ せきもり」とあるが重複語として数えた。約82%が重複語であり、異語数は約18%ということになる。

一方の『女源氏教訓鑑』を基本としてみると、総語数70語のうち、67語が重複語であり、「こなすいも汁 柳にまつ」「歌かるたハ ついまつ」「かみそりハ おけたれ」の3語のみが異語であり、約96%が重複語であることが知られた。

## 12 語彙の分類について

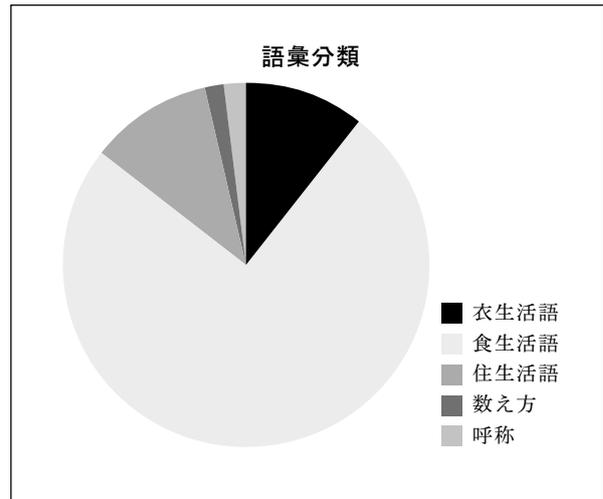
以上のように資料ごとに記載例を紹介してきたが、それらの語彙について整理分類した結果をまとめておきたい。本稿では、どういった語彙が女性特有の言葉遣いとして考えられていたのか、といった傾向をみることを目的とし、一応の目安として、品詞別とまた圧倒的多数を占める名詞について、五分類に整理してみた。9資料それぞれに記載された語彙は、異語数でみると、動詞が12語、形容詞は1語、名詞111語であった。つまり異語数では、名詞が87%を占めていたのである。

その名詞について、それぞれどういった種類の用語かを分析してみると、「餅」「米」等のほか「なすび」「大根」といった野菜類や「イカ」「海老」といった魚類を含めて、食生活語彙としてひとつの分類とし、「小袖」や「夜着」「帯」等を衣生活語彙、「鍋釜」「剃刀」等を住生活語彙として考えてみた。また、「母親」「父親」は呼称として、「銭百文」「金一分」を数え方として別立てに考えた。

(名詞の内訳)

- 【衣生活語】 12語
- 【食生活語】 83語
- 【住生活語】 12語
- 【数え方】 2語
- 【呼称】 2語

全体に占める割合でみると、衣生活語彙は約10.8%、食生活語彙は約74.8%、住生活語彙は約10.8%、数え方と呼称はそれぞれ約1.8%であり、食生活語彙の占める割合の高さが明らかとなった。女性たちの用語が、やはり衣食住といった生活に密着したものが多く確認できる結果といえるであろう。



### 13 掲載率の高い語について

近世期には、「御所ことば」や「女中ことば」としてひとつのまとまった語群として女性用語が認識されていたことを確認することができた。それぞれの資料によって、とりあげられた語には重複もあれば偏在もあり、またそれぞれの資料への掲載率にも相違があることを知り得た。資料による性格の違いや成立事情などについても考えておく必要があるが、ここでは、掲載率の高い語についてまとめておきたいと思う。多くの資料に存在した語であるという事実は、とりあげられるべき代表的な呼び換え語であった可能性が高いと考えられるからである。資料による表記の相違は無視し、便宜上の用語で示しておく。

#### 【9 資料に掲載された語】

(食生活語) 酒 だんご

#### 【8 資料に掲載された語】

(食生活語) 餅 しんこ 豆腐

#### 【7 資料に掲載された語】

(動詞) 起きる 寝る

(衣生活語) 紅

(食生活語) でんがく ゆのこ 大根 数の子  
香の物 たこ

#### 【6 資料に掲載された語】

(衣生活語) わた

(食生活語) こぬか こんにやく ぼたもち なすび  
くじら えび いはし

(住生活語) 鍋釜 せっかい

#### 【5 資料に掲載された語】

(衣生活語) 小袖 夜着

(食生活語) 米 ぬかみそ ふのゆき 白はし のり  
にぎり飯 塩 するめ

(住生活語) すりこぎ (れん木)

#### 【4 資料に掲載された語】

(動詞) 泣く

(食生活語) あま酒 赤飯 ちまき 豆腐かす ほし  
こり 竹のこ 菜めし 浅漬け ごまめ

(住生活語) かみそり ざる (みかき) しゃくし

### 14 まとめにかえて

1420年成立の『海人藻芥』<sup>11)</sup>では、「女房」が使う「異名」は、「一向不存知者当座ニ迷惑スベキ者哉」とされ、特殊な存在と扱われていた。しかし、近世期の「御所ことば」や「女中ことば」等は、中世期の女房ことばから継承された呼び換え語が多いとはいえ、特殊な用語から、次第に遠回りで丁寧なことばとして受けとめられるようになっていく。

隠的な役割を担っていたこれらの語彙は、生活に密着した身近な用語が多かったという事情もあり、次第に庶民にまで受け継がれていったのである。本来の使用と同様に女性語や丁寧語として生き残った「おしたじ」のような語もある一方で、現代においては、女性だけでなく、一般語として定着した用語—「きなこ」「おかず」等—の存在も確認できた。他方、多くの資料に記載されながら、消滅していった用語もある。

ことばそれぞれのたどった道筋は一樣ではないが、特殊用語から一般語化への経緯の一面について提示できたと思われる。過去の女性たちの言語形成力や文化継承力が、現代語彙に与えた影響は小さくなかったといえるのではないだろうか。

## 注

- 1) 拙稿「往来物にみる「女ことば」について」(関西文化研究センター編『関西文化研究叢書第10巻』2008年11月)参照。
- 2) 國田百合子『女房詞の研究』(風間書房、1964年)、『女房詞の研究 続編』(風間書房、1977年)等参照。
- 3) 飛田良文編『日本語学研究事典』(明治書院、2007年)によれば、「女房ことば」という言い換え語が、近世期には「御所詞」「女中詞」「大和詞」と呼ばれたと説明される。
- 4) 松井利彦「女中ことばの位相」(『国語語彙史の研究 二十四』2005年)等参照。
- 5) 石川松太郎監修、小泉吉永編著、『往来物解題辞典 解題編』『往来物解題辞典 図版編』(大空社、2001年)等参照。
- 6) 土井忠生・森田武・長南実 編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980年)による。
- 7) 『日葡辞書』の「婦人語」に関する論考としては、國田百合子「女房ことばと婦人語」(『国文目白』10号、1971年)、小林千草『『日葡辞書』の「婦人語」—言語生活史的考察—』(『成城大学短期大学部紀要』

26集、1995年3月)等参照。

- 8) 中田祝夫・小林祥次郎著『書言字考節用集 研究並びに索引 影印篇』(風間書房、一九七三年)による。
- 9) 小型机上版の辞書は、生活上、必要で基本的な用語が記載されているとの判断による。『新明解国語辞典(第5版)』(三省堂、1999年)によったが、中型の『広辞苑(第6版)』(岩波書店、2008年)にも「まめのこ」「きなこ」に同じ。」と説明され、「きなこ」の語が基準とされている。
- 10) 『日本国語大辞典(第2版)』(小学館、2000年～2002年)による。
- 11) 塙保己一編纂『群書類従 二十八輯』(続群書類従刊行会、1958年)による。

## 付記

貴重な文献資料の閲覧許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、東京大学総合図書館の関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

(2010. 8. 9 受理)